間違って勇者を召喚してました。　反省はしません！

瀧澤志栄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
間違って勇者を召喚してました。　反省はしません！

【Ｎコード】
Ｎ２３４６Ｌ

【作者名】
瀧澤志栄

【あらすじ】
ちょっとした手違いで、異世界から勇者を召喚しちゃいました。
別に用は無いんで、適当に暮しといて下さい。
封鍵　晶の逆！？　召喚ストーリー。
いろんな世界からいろんなチートな奴が迷い込んで来ます。
無意識に引き起こされる召喚、なんか身についちゃった能力などなど、カオス＆カオスなドタバタチートストーリー。

プロローグ　始まりの召喚（前書き）

本編唯一のシリアス回です。
めんどくさかったら即、次話に行って下さい。
…内容はじゃんじゃん変えてます。

プロローグ　始まりの召喚

～晶サイド　ｉｎ　異界～

「あっ、副会長！　人手が足りないんで、仕分け手伝ってくれません？」

テストの終わった午前中。

生徒が開放感で浮かれつつ、
各々帰宅または部活で急ぐこの時間。

特に急ぎもせず歩ている俺を呼び止める声。

振り返ると、わが校生徒会の書記の姿。

「構わないけど……それよか役職名で呼ぶの止めてくれない？」

「いえ、それが礼儀ってもんですから」

さすが堅物と言われるほどはある。彼女はそう言いながら、俺を急かす。

「早くして下さいよ！　会長がものすごい剣幕であなたを呼んで来いって」

「ぐぅっ、あの人がそう言う時の用事って、ろくなことが無かった

なぁ」

面倒になってきたが、会長を怒らせてどうなるかは知れたもんじゃないから。

俺は渋々早歩きで生徒会室に向かう。

……その後は？

俺は必死で記憶を弄るが、その欠片すら出てこない。

見事に欠落していた。

…多分、これが始まりだったんだろう。

こんないかれた世界に、俺が巻き込まれる。

「支度が出来ました。宣戦布告をお願いします」

そう、魔王となった俺が。

「ああ、殺してやるよ。対立した以上な。　…煉瓦」

～???サイド　ｉｎ　始まりの場所～

「やはり、行くんだな」

わたしは答えない。
ただ、ゆっくりと一歩を踏み出すことによって、その揺るがぬ意思を伝える。

「全く、最初に不可能と言ったのに……。お前はやすやすと私を超えるな」

「……そんな。皆が、手伝ってくれた結果だよ」

そう。神すら否定した奇跡を、皆は起こしてくれたんだ。

心の中で何度も感謝の言葉を呟く。だが、それゆえ別れは一層悲しくなってゆく。

「世界を一つにまとめる、か。案外、お前こそが神に成るべきだったのかも知れないな」

深い感慨に満ちた言葉。

終末へ向かう虚無感と、長年の望みが叶う喜びとの狭間で、その言

葉は私の胸を渦巻き続ける。

「…そんなことは無いよ。わたしはまだ、何にも知らないし、何も出来ない」

ただ、わたしは奇跡に縋っただけ。

その結果がどうであろうと、自分の力で切り開いた未来とは違う。

だから。

「さようなら、ね。全能の神様」

また一歩、強い決意とともに踏み出す。

「ふふっ、…さらばだ、最強の雫（しずく）」

此の世界では言われ慣れた言葉だったが、去り際に今更聞くと、少し照れ臭い。

「最高の世界（ユートピア）に、恒久の平和を願うわ」

「……」

わたしを見送る彼女の表情は分からない。

ただ、少しの沈黙の後。

「お前の『第三の人生』に、永久の幸福を」

そう祝福する声にわたしは大きく頷き、そしてまた一歩……。

「…案外、近いうちにまた会えるかもしれないな」

ひっそりとしてしまった無限の空間。
彼女は全てを見通し、そして呟いた。

「願わくばこの少年にも、永久の幸あらんことを」

その日、一つの世界で、

世界を救い世界に救われた、たった一人の英雄が、

奇跡の力で、静かに去って行った。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅ．．．．

プロローグ　始まりの召喚（後書き）

ども。一週間に二作も始めるというアホをやらかした、瀧澤志栄です。
今作はまさかのそっち！？というストーリーです。
展開はやはり遅いですが、是非ともよろしくお願いします。

……内容が変わりまくっています。最初は未来での回想で、その次が過去です。

そして、方向がおかしくなったりしたら感想で叩いてください。作者は叩くと伸びます。ええ、さながら金属のように。
電気と熱の良伝導と金属光沢は、現在習得中です。乞うご期待！

はい、脱線しましたね。つまりは感想下さいという懇願です。
えー、この後は召喚オンパレードでパロディーだらけですので、知識の乏しい作者にいいネタを！
…なんか本編より長くなりそうなので、とりあえず志栄はよく喋る、ってことを覚えておいて下さいね。それではっ！　Ｔｓｈｉｅｉ

第一話　　電波娘の召喚（前書き）

トアル日本ノ町角ニテ・・・・・・・・

第一話　　電波娘の召喚

「さあ手を出して！　あなたの運勢を占いま～す！！」

夕暮れの路地裏。
異常なテンション。
魔女のような格好。
テーブルの上には怪しげなタロットカード。

そう。俺は今、そんな謎の占い師に捕まっｔ

「だーかーらー、占い師じゃなくて魔法使い！！最上級のね！」

うっ、こいつ心まで読んできやがる！

さっきから超能力のオンパレード見せられて、若干こいつ本物か？
　と思ったりもしてるんだが、やっぱ腑に落ちねぇ。

「大体なんで最上級の魔法使い様が、こんな道端で占い師ごっこなんてやってｒ」

「ああ～それね。すんごい壮絶な話になるけどいい？」

……いちいち話を遮るな！

「そうそう、あれはまだ私が十四の頃……」

勝手に話し始めてるし。

もう、なんか長くなりそうなので、自己紹介をここらでしておこう。
俺は封鍵晶（ほうけんあきら）。職業は高校生。それ以外には……特に語ることは無い。
しいて言えば、特異な状況にもある程度適応できるってとこかな？
今みたいに。

ついでに目の前にいる黒服の変な奴（自称魔法使い）は、女性。大きな帽子のせいでそれしか分らん。
あっ、一つ分かる！　自己中だ。

「…そこでさ、わたし死んじゃったみたいなのよ！　それで神様がねー」

ぬ？
あれっ？　こいつほんとにすごい話してたみたいだぞ！

「ごめんマジごめん最強能力付きで転生させてあげるから許してね、ねっ！て言うから……」

カミサマ腰低いな。つかマジで何の話だ？　これ。

「いやいやながら異世界に行ってきたわけよ。そしたら、そこにはモンスターがいっぱいいてね、
いきなり戦う羽目になって……その頃はまだ力の制御が出来なくて、砂漠一帯を火の海にしちゃったんだよ。それには王都親衛隊もカンカンでね」

駄目だ。ついていけない。
はい、状況整理してみよー。

俺はコミックの新刊買いに町を歩いていた。
したら、裏道でテーブル並べた怪しい奴に出会った。
いきなし名前を呼ばれた。
びっくりしてたら、こいつにズバズバと俺の今抱えてる悩みを言い当てられ……。
気付いたら椅子に座ってこいつの話を聞いていたってとこだ。

つまり俺の次にやるべきことは――――――

「王様にわたしの魔力値フツーの１０００倍以上あるって言われてね……って、
　あんたどこに行こうとしてるの！？」

ばれたか。うまく逃げだそうとしてたのに。

「いやー。ちょっと本を買いにいk」
「そんなことは許さない！！」

許さないのかよ、どこまでも自己中だな。
「だが知らんっ！！」

考えてみたら、俺がこいつの話を聞く必要なんて全くねえんだ。
怪しげな能力で圧倒されてたけど、ただ口車に乗せられていただけ。

……だったら、ここらで退散しよう！

当初の目的、本の購入をするため薄暗い道を俺は疾走する。
大丈夫だ、もうあいつとの距離は１００メートルくらい……

「ほーら、逃がさないわよ！」

前方注意！　さっきの魔女さんが両手を広げて待ち構えてる！！

なんだこいつ！？　瞬間移動もできんのか！？

「あたりっ！」

お出来になるようです。つか、また心読まれたし。

くそっ！

とりあえず左足を重心に右方向へ飛び、魔女の手を回避する……が、

「だーかーらっ、それも読んでるって」

またもや瞬間移動。突然目の前に人が現れる　って、

「そんなん避けきれねえよっ！！」

「ふぇっ！？」

ぼーーん。

俺の不本意なタックルを食らった魔女さんは、以外と呆気なく吹っ飛んだ。

「痛ぁぁ…よくも！！」

いや、あんたのミスだろ。

様子をいちいち確認するほど余裕はないので、俺は走り続ける。

「えーい　めんどくさい！！

時(クロノス)を司りし神との盟約によって呼びかけん。夢乱し地を蝕む流れを沿う熾天使達よ。集い大いなる制約を揺るがし狭間を射止めよ。

?????????? ??r?p_?m ……」

うぉいっ！　何か後ろで詠唱している奴がいるぞ！　やっぱあいつ中二病か？

「時間停止っ！！」

！！？

って、そんな簡単に止まってたまるか！　俺は早く新刊読みてーんだよ！

「あっ、あれ？効いてない……」

ちょ、素で驚くな！！　ちょっと合わせてあげたくなるじゃんか！！　んな暇無いのに。

「そんな…。まさか連続で瞬間移動しただけで魔力尽きるなんて……っ！？」

バタン

明らかに人が倒れる音。

流石に俺も後ろを振り返ったよ。

するとそこには…・・・。

道に伏している少女。
漆黒の帽子は粒子のように光り消えてゆく。
露わになる素顔。
黄金の髪は乱れ、口元は苦痛に歪められている。

「えっと、もしかして俺のせい？」

へんじがない。ただのしかばねのようだ。

ふざけてる場合じゃない。
その間にも帽子は完全に消失し、さらには彼女の黒いスカートまで
……って。

「やっべ！！どうにかしなきゃ！！」

もうすっかり夜になっていた。
街灯も少ない路地裏。
俺は、闇の中　儚く輝いている気絶した少女を担ぎ走り出していた。

888888888888888888888888888888
8888888882888888888888888888888

「ふべらっっ！！」
吹っ飛ばされた。

「マジあり得ない！！　何なの？ふざけてるの？　どうしてくれるの！？」
あー、めっさ興奮されてるな。後メチャクチャ背中痛え。

「ぐをぉっ！！」

本棚に衝突。
雪崩発生。
俺の脳天に２００００のダメージ。
アキラ、戦闘不能。謎の少女の勝ち！

８　２　８

「……落ち着きましたか、お嬢さん」
「うん、　　なんかごめんなさい」

現在の状況。
深夜三時なう。
我が家で俺は、自称魔法使いさんと向き合ってます。

この惨劇の説明。

まず、あの後俺がカッコつけて気絶したこの子を家へ運びました。

したらば、一時間ぐらいでムクリと起き上がり、自分の姿を見て絶叫。

……まぁ、裸で布団に包まってたからね。

いやいや俺は見とらんよ！服が粒子化して消え始めてたから慌てて布団巻きつけて放置しただけだし。

んで、恐ろしい勘違いをして下さったこの子は、俺をフルボッコにし、結果　今度は俺気絶。

そして、ようやく頭の冷えたこの子に事のあらましを話したってとこだ。

「そういえば、あの服も魔力で作ったものだから、魔力切れで消えるのは当たり前ね……」

ちなみに今こいつは俺のパジャマを着ている。いつのまにかタンスを漁っていたらしい。

「つか、さっきからナチュラルに魔力魔力言ってるけど、なんなのさそれ？」

とりあえず俺は質問してみる。

「あー、説明しづらいんだよね。いちいち定義してくの面倒だから、もうゲームのそれだと思って」

「つまりお前は、末期のゲーム中毒者だと」

「リアルの話よ！ていうかあなた見たでしょ？魔法の奇跡を！」

確かに…いとも簡単に瞬間移動とか心読んだりしてたけど。

「で、なんであなた様は魔力をお持ちになられるのですか？」

「ふふんっ、そんなの決まってるじゃない！わたしが勇者だからよ！！」

今度は勇者かよ。さっきまで魔法使いじゃなかったっけ。

「んなこと全然信じられん。中二病を拗らせたようにしか見えない」

「いいわ！信じるまで話してあげる。なんたってわたしは神に選ばれたんだから！！」

またその話ですか……長くなりそうだ。

とある少女の話を要約する。

神様のミスで少女の運命が狂い、死んでしまった。
そのお詫びに神様は少女に新たな生を与え、さらには最強と呼べるような力を持たせ、異世界に転生させた。
その能力とは、
地球に存在する全ての空想を実現させる力。

魔物が生息する世界で、少女は能力を使い生き延び、その力が周囲に認められて「神聖大魔導士」と呼ばれる最強の魔法使いになった。
そして、世界を破滅させようとする大魔王に立ち向かい、勝利した。
それによって少女は伝説の勇者となり、絶大な支持を得る。
最後に、世界にある全ての魔力によって起こせる「終末の奇跡」と

いう魔法で、少女はこちらの世界に無事戻ってきた……ということだ。

結果、俺が分かったこと。
こいつはもう中二病の段階じゃない。薬物中毒だ。

「でね、帰ってきてびっくりしたんだけど…魔力がほとんど無くなってるの！
それこそ全盛期の十億分の一くらい」

……まだ続くのか、この話。
きっと現在１５０話くらいいってる。
俺もそろそろ飽きてきたぜ～。

「しかも、この世界にいたころの記憶が消えてて、自分が誰なのかもわからない。
だから、とりあえず食費を稼ごうとして占い師を始めたら……」

こいつ、記憶が無いのか。
ちょいかわいそうになってきた。

「丁度いいカモを見つけたから、捕まえて金を巻き上げようとして…今に至ると。
やー、でも良かった。今夜は泊るところがあって」

前言撤回。こいつに情けは必要ない。

「あれ？陽が出てきたね。話してるうちに朝になっちゃった」
どんだけ人を巻き込めば気が済むんだこのアマ！
「ん～。ま、この話を人に知ってもらっただけでも少し気が晴れたわ。そんじゃ、おいとましまーす」
やっと帰るのか、よかった。これで俺も普通の生活に戻れ――――――
待てよ。
俺、昨夜あいつを担いで家に運んでた時、近道だからって駅前通ったよな。
それってよく考えてみれば多数の人に見られてい
「ちょまて魔女！！」
「何の用かね？わたしは今から紐無しバンジーをS」
「ボケはいい！いったん止まれ！！」
大声で叫び少女の行動を制止する。
流石にびっくりしたようで、窓から飛び降りるのを止める少女。
「どっ、どうしたの？血相変えて」
「名前と住所っ！すぐ教えろ！」
俺はすかさず机の上から紙とペンを掴み、少女に渡そうとする。
「え…そんなの覚えてないし。言ったでしょ！記憶喪失だって。そ

れに、そんなこと聞いてどうするの？」

「くっ、そうだったな。じゃあどうすりゃ……いや、記憶喪失だって伝えればいいだけか！」

「さっきからどうしたの？　テンション高くない！？」

「ちょっとついてこい！　警察にお前を保護してもらう」

そう。

こんな調子の電波娘を放置して、何か問題を起こさない方がおかしい。

そして、責任を問われるのは……。

絶対俺だ。

目撃者には保護者に見えていただろう

こんなん正直もう巻き込まれたくないから、先手を打たせてもらう。

ところがどっこい、

「やだよ！　そしたら完全に施設送りじゃん！　わたしはジューがいいの！！」

おもいっきし拒否られた。

「じゃあ、俺はどうすりゃいいんだよ！」

「へっ？　…もう、いっそのこと保護者になっちゃえば？わたし、あんたみたいなの好きだし」

……告白なのか？　これは告白と受け取っていいｎ
「違う違う。いじりやすい、って意味でｗ」
笑うな！！

かくして、不本意ながら俺　封鍵晶は、ドＳな寄生虫を買う羽目になりました。
他にいいアイデア出てこなかったし……。
「泣くなアキラ。人生ってのはうまくいかないんだよ」
「お前が言うなよ！！……えっと」
「んー。確かに呼び名が無いってのは不便だね」
「ちなみにお前、その――――――異世界ではなんて呼ばれてたんだ？」
「神聖大魔導士サマっ！　とか」
「参考にならんな」
「アキラが決めてもイイよ。センスが良ければ」
「そうだな……、マリファナは？」
「なんで麻薬なの！？」

「お前　薬中っぽいからね。ちなんでみた」
「嫌なちなみ方だねっ！」
「じゃあ……、マリ？」
「そのアイデアもマリファナから来てるんでしょ！！もういい加減にしないとR指定になるよ！」
「ならマリに何かを付け足して――――。あっ　止めとこう、こいつじゃ荷が重すぎる」
「何に気付いたのよ！」
「いや、金髪に魔女の帽子って、ある人物を連想させるな」
「わたしは巫女さんの知り合いなんていないわよ」
「大体、金髪に赤眼で日本語流暢に話すって、あんた何人だよ」
「そーゆー記憶も根こそぎ持っていかれてまーす！」
「ちっ、もうめんどくさいから、俺が呼びやすい言葉でいいな？」
「タイマッ！　とかじゃなければいいよ」
「ん～と、……煉瓦（れんが）！」
「それが言いやすい言葉って、おかしくない？」

「ごめん。ぶっちゃけテキトーだよ」

「ぐっ、まあいいわ。変だけどなんか気に入ったし。ただし、気持ち瓦っていう文字が堅苦しいんだけど……」

「あー別に構わん。こだわって無いから。まあ基本　煉、って呼ぶよ。つことで煉！さっそく朝飯だ。ぐだぐだ話してたら7時になってるという大惨事が起きた」

「がんば！わたしはハムエッグがいいな」

「手伝え居候！！つか魔法使ってパッパとやってくれ」

「わたし、の、まりょくは、まだ、かいふく、してません」

「文節分けにもなって無いぞ。ほら、早く支度しろよ！」

「ふぁあああ　バタリッ」

「寝るなッ！！」

そう、煉瓦との生活が唐突に始まった。

……これが運命かどうかは、すぐに分かることとなる。

第一話　　電波娘の召喚（後書き）

ども。瀧澤志栄です。私は大麻とかやってないので安心して下さいｗ
えーやはり、異常なほど展開が遅いですね。召喚のしょ　の字も出
てないです。
次回は、ようやく召喚していくので、海の如く深い心をお持ちであ
る読者の皆様、あー更新したんだぁ、暇だから見よっかなぁ…。位
のお気持ちでどうぞ！

Ｔｓｈｉｅｉ

第二話　色欲の召喚

「はいっ！　この魔法陣の中央に手を置いて、今から言う言葉を復唱して下さい！！」

朝っぱらから異常なテンション。
つか、そろそろ寝かせてくれよ……。

強制的にすんごく豪華な朝飯を作らされ、疲労と睡眠不足で参ってる俺に、煉瓦はお構いなしで謎の儀式を始める。
俺が飯作ってる間爆睡してたこいつは、まだまだ元気いっぱいのようだ……勘弁してくれよ。

「復唱要求！我、左腕にラファエルを宿す者なり！！」

「拒否する」

突然何を言い出すんだこいつは？　俺はそんなもん宿してない。

「いいから言いなさいって！！ただ運勢占うだけだから！」

「別に占ってほしくないし」

そんなの朝の血液型選手権で十分だ。

「……黒魔術の儀式って、準備大変なんだよね…」

「われっ、左腕にラファエルを宿す者なりっ！！」

猟奇的な笑みをこちらに向ける煉瓦を見て、俺は慌てて復唱する。

こいつの話では、呪いがかかったら軽く一年は運勢最悪らしい。

こいつの本気は半端ない！！

そんな覚悟なんてできないから、俺は必死で復唱する。

「よしよしえらいぞ！　じゃあ次。「√？ＭＤ？σμοδα？ο？？？？？？？？？？？√？？？？……」

…ん？

咳でもしたのかな？　煉瓦ちゃん。

オニイサン、全然聞こえなかったなぁ。

「……ゴメンナサイ　ニホンゴデオネガイシマス」

「土下座っ！？　なんでそこまで真剣なのさ、アキラ？　別に呪ったりしないから大丈夫だよ！」

そんな声が聞こえてきて、俺はようやく顔を上げる。

よかった。復唱できなかったらその場で殺されるんじゃないかと思ってたが……。

ちなみに、なんでここまで俺が煉瓦にビクビクしてるかっていう疑問は、彼女の手の中にあるとある物体が教えてくれる。描写はとてもできないから想像に任せよう。とにかくこいつは恐ろしい。

「ん～と、直訳でそれっぽく言うと……、『其が服従せし主、ラファエルの命に従い、顕現せよアスモデウス！！』　…かな？」

「……何でたかが今日の運勢のために、ソロモン72柱の魔神を召喚するのですか？」

「おっ！　よく知ってるねアキラ！　そう、大悪魔アスモデウスは、美女サラに取りつき夫を七人も殺したのち、大天使ラファエルによってエジプトの奥地に封印されたんだけど……」

煉瓦が長々と語り出しそうだ。もう俺は慣れているので、遮って質問を繰り返す。

「だから、そのアスモデウスを何で呼び出すんだよっ！」

「あぁ…それはね、テキトーに魔法陣かいてたら丁度アスモデウスのだったってだけで、特に深い意味　は無いよ。　もっとも、ほんとに呼び出す訳じゃないから。
…それに、もうわたしには、それだけの魔力も残って無いしね」

煉瓦は寂しげに笑う。最強の力を失っていくのを、彼女はどんなふうに感じてるのだろうか。
……慰めた方がいいのかな？　俺がそんなことを考えていると、

「まあ召喚者はアキラなんだし、適当に魔力撒き散らしてくれればそれでいいよ」

「ん？　ってことは、オレも魔力を持ってるのか？」

「うん。どんくらいの量かは分からないけど、確かに持ってるよ。だからわたしも声かけた訳だし。
まあ、とにかくやってみてよ！もしかしたら本当に出てきてくれるかもよ？」

やった！　俺魔力持ってたよ！　ちょっと感激！
……なんだかんだ言って魔法はロマンだからね。　って、俺も中二だな。
しかし、アスモデウスか……。悪魔なんだからきっと恐ろしい姿なんだろうな。
まっ、スーパー普通一般人の俺が召喚できるわけがないけど…ちょっと期待。

「んー、じゃあ言えばいいんだな。
えっと、其が服従せし主、ラファエルの命に従い、顕現せよアスモデウス！！　だっけか？」

ちょっと魔術師っぽく、高らかに呪文を唱える俺。

「……くくくっ、守護円陣も無いのに悪魔なんか召喚したら、即死だよ？　アキラ」

「うぇっ！？　今更そういうこと言うの止めてくれませんか煉さんっ！！」

このクソ魔女っ！　俺を殺す気だったのか！！
さっきの期待が一瞬で恐怖に変わった。
ただじっと、魔法陣を見つめる。

……フーーー。
なんも起きねぇ。
びっくりするぐらいこの世界は平和だな。
科学って素晴らしい。もう解明できないことは無いってくらいに。

…ねえ、辛いよ。
怖がりながらも、魔法が使えるかもって、内心ドキドキしてたんだよ。
結果がこれだ。
煉瓦はくすくす笑ってるし、魔法陣は微動だにしない。
俺、ほんとに魔力持ってるんですか？

「…残念だったねｗｗ　まあこの世界で召喚なんて出来る筈がな――――」

煉瓦は言いかけた。
しかし、その次の言葉は出てこない。何故なら……。

魔法陣の上に置いていた手が、突然真紅に染まる。
俺は驚いてすぐに手を離したが、既に遅かった。
掌にくっきりと残る召喚陣。
幾何学の紋章は部屋中に照射され、周りが魔法陣に埋め尽くされる。

声が出ない。
俺はその美しくも恐ろしい光景に、煉瓦はよく知っているがもう見ることは無いと思っていた状況に。

赤い螺旋は、ゆっくり俺たちを包み込み、そして一斉に弾ける。

無数の黄金の蝶が舞った。

眼下に残っていたのは、まぎれもなく人の姿。
羽織る上着は赤、いやこれは…血の色だ。

黒を基調としたフリルのようなスカート。
だが、端は鋸歯状で、なんというか…危うい。
少女は、美しい金色の髪を靡かせ、恭しく礼をする。
ツインテールが、揺れた。

「色欲のアスモデウス、ここに」

おいっ！！　クソ魔女っ！！
俺は小声で、しかし怒気を孕ませて煉瓦に呼び掛ける。
呼ばれた少女は、かなり混乱していたが、やがてゆっくりと口を開いた。

「…よかったね。あんた、大召喚士だよ」

「んなことどうでもいいだろっ！！　どうすんだよ！　本当に来ちゃったよ。殺されるの？　俺、守護円陣とやらが無いから殺されんの！？」

声を荒上げた俺に気付き、魔法陣の中央にいたアスモデウスはこちらを向いた。

「ご主人様。本日から契約によりあなた様の家具となる、アスモデ

ウスです。よろしくお願いします」

もう一度ぺこりとお辞儀をするアスモデウス。優しそうな笑みを浮かべてはいるが……

「やっだぁ～、家具だなんて　アキラ、どんなプレイよ？」

「ふざけてる場合じゃないだろ　煉！！
あれ、どっから見ても煉獄の七姉妹の末っ子だよね！？　う○ねこだよねっ！？」

「わたし、こないだまで異世界言ってたから分かんない～」

「お前、おおかみか○しの番外編どうだった？」

「全話の中で一番おもしろかった。あれ出オチだったから展開読めてて……」

「さっき嘘ついたよな。謝ろうな」

「ごめんなさい向こうでもｙｏｕｔｕｂｅが見れたんで全部知ってます」

…こいつの異世界大冒険の細かいストーリーが気になってきたが、今は置いといて。

「状況を整理しよう。まず煉が普通の召喚陣を書いた。それで俺が召喚ごっこやったら、七杭の一人が出てきた…と。うん、全然理解できない」

「とりあえず、腹を抉ってもらったら？　アキラ、マゾなんでしょ？」

「ふざけるのもいい加減にしような。俺、めっさテンパってるから」

極度の緊張で、何故か軽口をたたき合う俺たち。

人間、やばくなるとぶっ壊れるんだな。

「あの～、ご主人様？　私に何かご命令は……？」

（アスモちゃんがイラついてきてるわよ、どうにかして！）

（…テレパシーもできんのな、お前。あと俺じゃどうしようもない）

（あんたが呼んだんでしょ！　返すなりしなさいよ！）

（んなこと怖くてできるわけ無いだろ！　キレられたらどうすんだよ！？　お前がやれって言ったんだ！自分で責任取れ！）

（ぐっ…言い返せない。　分かったやってあげようじゃない！この伝説の勇者が！）

煉瓦はいやいやながらも立ち上がり、ビクつきながらもアスモデウスの元へ向かう。

「はーいアスモ！　ご姉妹は元気かしら？」

「ご主人様、この馴れ馴れしいメスを殺せばいいんですか？」

そう言って笑うアスモデウス。う〇ねこキャラは笑顔が怖いなぁー。

「まっ、待て！！　落ち着けっ！！」
必死でアスモの行動を制止する俺！！
アスモは残念そうに、腕から伸びるブレードを解除した。
「うぅっ、力が無いって…怖いねぇぇ」
煉瓦が泣きながら俺の元へ駆け寄ってきた。
最強の魔女を泣かせるなんて、どんだけ恐ろしいんだアスモデウス！！
「すまんっ。間違えて召喚したんだ。今日のところはどうかお引き取りを」
俺は不敵な笑みを絶やさないアスモデウスに懇願する。
召喚なんて、二度とやってたまるかっ！！
「分かりました。丁度今ベア〇リーチェ様からお呼び出しがあったので。それでは失礼します。
ふふっ、今回の獲物はあのカ〇ンとか言うかわいい坊やか…怯えてるかなぁ？フフフフッ」
すごく気になる言葉を残して、アスモデウスは黄金の蝶となり消えた。
……頑張れカ〇ン。お嬢様を守りきれっ！！

陽が昇っていた。

世間的には日曜日のお昼。

しかし俺たちは、疲労でぶっ倒れていた。
特に俺は、睡眠不足、初めての魔力行使、恐怖と、三点セットでご提供いただいたので、正直一日中寝てたい程疲れた。
あれっきりアスモデウスはやってこないし、諸悪の根源である煉瓦もダイナミックにベッドで寝てる。……くそっ、俺のなのに。

なんだかんだで訪れたしばしの安息。

次に起きたら、いい加減漫画の新刊買わなきゃな、と思いつつ瞳を閉じ、床で眠ろうとする俺には、煉瓦の背に刻まれた紋章が輝きだしていることなんて気付けなかった。

第二話　　色欲の召喚（後書き）

ども。Ｗｉｋｉを多用する瀧澤志栄です。
今回は、何故かアスモデウスが出てきましたね。何でこの子なんでしょうね？
理由は簡単。Ｗｉｋｉで　悪魔　と調べたら、最初に目についたのがこいつだったからで―す！
……う〇ねこファンの皆さん、こんなアホがパロディとして出しちゃってごめんなさい。
こんな感じで、志栄の乏しい知識からキャラをパクっていくので、間違ってたら『そいつはそんなキャラじゃねぇ！』と、ぜひご指摘ください。速攻で修正します。それではっ、次回は神様の登場、そしてようやくの解説編です。

最後に、こんな駄文に付き合っていただいてありがとうございました。
Ｔｓｈｉｅｉ

第三話　異世界に召還　出会い頭のドルマドン編　（前書き）

私は説明シーンが苦手です。
だから、いつも誰かが要約します。

第三話　異世界に召還　出会い頭のドルマドン編

油断した。

言い訳を考えるなら、この言葉しか思いつかない。

とにかく、今起きている事態は、このヘンテコ能力を持つ少女を一時的にも放置したら、絶対なんか起きるってことに気づいてなかった俺のミスだ。

「ねぇー暇だよ晶君！　しりとりしようか？」

「うるさいっ！」

「しゅん……。せっかく仲良くなろうと思ったのに」

横には、唐突にガキみたいな提案をしてくる少女。

その隣には気絶してる煉瓦。

ふーむ。このトラブルは回避不能だな。解決策が思いつかん。

状況の整理をさせてくれや。

「もう一度聞こう。君は誰だ？」

俺の計3度目の質問に、嫌な顔せず同じように答える少女。

「神様だよ☆」

ぐっ、やっぱついて行けねえ。
神様とか勇者とか魔女とか……。
なあパトラッ〇ュ…俺はもう疲れたよ。ってことで
ばたーり@

「えー晶さんはログアウトしました。というわけで、私が読者の皆様に解説をすることとなりました、神です。よろしく〜！！」
「をいっ！！　人を勝手に物語からはじくなッ！」
「うわっ！　生き返った！　……もう、そんな怒っちゃやーよ☆」
「一言ごとにいらつきが増してくが、まあいい。とりあえずは説明だ。
昔話っぽく言うと　えー、あるところに晶さんという好青年と、煉瓦というムカつく電波娘がいました」
「煉瓦さんが川で洗濯していると……川上から大きな桃がっ！！」
「話を改ざんするなっ！！」
「そう、これがこのヒナ〇ザワに伝わる、桃流しの夜なのでした」

「誰も消えたり死んだりしてねーから！！」

「……いやな、事件だったね」

「なにがっ！？　もう、話をややこしくするのは止めてくれ神様っ！！

えっと、それでその煉瓦さんは異世界からこの地球に帰ってきて、魔力がほぼゼロ状態でなんも出来ないから、いろいろあって晶さんちに転がり込んで来ましたと」

「そして次の日、辺りは血で――――」

「うるさい！！　そしてう〇ねこの世界から七杭の一人を召喚したりと、ドタバタしたので、二人は疲れて眠っていました」

「そこで私登場！！」

「そう、神様と名乗る変態少女が現れまして、煉瓦の意識を一瞬で奪って……」

「晶さんの家をぶっ飛ばして、現在異世界へ移動中です☆」

「サラッと言うな！！　大体何でうちをぶっ壊す必要があった？」

「異世界の窓を開くには、犠牲が必要なのだよ」

「全く……戻ったら直せよ！」

「みゅっ？　直す？」

「あんた神なんだろ、そんくらい直せるでしょ！？」

「いや、直せないけど……っと、着いたよ！」

「ちょまてよ！　直せないってオイ！　ふざけるなよっ！！」

まさか家あのまま！？

睡眠すら雨天中止になりそうな家なのに！？

怒りと絶望で染まった俺の瞳には、異様な光景が広がっていた。

人型の獣の群れ。

こちらを見つめ、涙を流しながら歓喜し、口々に叫ぶ。

「神聖大魔導士サマ～～～！！！！！」

ナニコレ？

怒りも忘れてただ呆然とする。

そして後ろでは……。

「むぅ～、魔力に満ちてるな。ここは一体……！？」

「神聖大魔導士サマのお目覚めだぁ～！！　よかった！　世界は救われた！！」

群衆がどよめく。たった一人が欠伸交じりの声を発しただけで。
「……おい、煉。起きたんだったら今どういう状況か、詳しく説明してくれないか？」
当惑しまくっている俺が、今一番いい回答をくれそうな煉瓦に助けを求める…が。
「オイそこの人間！　神聖大魔導士サマに話しかけるんじゃねえ！！　邪気が移る！！」
ムカッ
でも俺はキレません。大人だからね！
「いやいや、その神聖大魔導士サマが路頭に迷ってるのを拾ってあげたのは俺だからね。つまり、俺がこいつの保護者ってわけ☆」
さてと、この魔族（仮）達も、偉大なる俺を讃えてくれるかな？
実際こいつの面倒見るのはめちゃくちゃ大変な訳だし……。
しばし、皆さんは固まっていた。　困惑と怒りの表情で。…ってあれ？
やがて、フリーズした群衆の中から明らかに最長老っぽいのが出てきた。
「我らにはこんな伝承があるのじゃ。
世界に大いなる災厄が起こる時、一人の人間　天より舞い降りる。

その姿を見たのなら、すぐさまこうしろと」

ん？　これは勇者を讃える雰囲気かな？　いや、別に俺が勇者ってわけじゃ……。

「喰らえッ、ドルマドン！！」

ぐべらっっ

なんか黒い塊が目の前にっ、と思った時にはすでに俺は吹っ飛ばされていた。

「災厄をもたらす人間の弱点はドルマ系だから、最初のターンで倒しとけ、と」

「さすが最長老様、見事な一撃でした！！」

なにこれ？（二回目）

「アキラッ！　大丈夫か？　……もう、お前らこいつを誰だと思っている？　わたし専属の執事なんだよ。無礼だろうが！！」

……執事違う。

「はっ、失礼しました神聖大魔導士サマ専属の奴隷殿！」

……いい加減ぶっ飛ばすぞ？

よっこらしょっと立ち上がる俺。体の周りには岩の破片がいっぱい。どんだけ強い力で吹っ飛ばされたんだよ？

「おおっ、これを食らってすぐ立ち上がるとは、化け物並みの生命力ですね」

「そこの最長老、新しい最長老にバトンタッチしたいのか？　あと、俺からみればお前らの姿が化け物だ」

「それで、わたしに助けてほしいって…何があったの？」

無視かオイ

「説明いたしましょう。では、第四代　吟じマスター？　お願いします」

「了解しましたぁぁぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁあああぁぁぁぁあああ」

吟じやがった。
激しくムカつくなこの魔族。

「よぉぉおく分かったよ！　つまりは、この世界に協約無魔物が出現し、困ったので神聖大魔導士サマに助けてもらおうと。　うん、その気持ちは分かる。怖そうだもんな　魔物。
だがな、一つ聞きたい。　……俺、この場に必要だったか？」

静まり返った.
さも、『えっ！？　お前が勝手に付いてきたんじゃねーのかよ！？』とでも言いたげに。
本当は巻き込まれたのに、魔族どもは俺を呆れたように凝視している。

泣きたくなって来ました。

「…あの～　その件については、わたしが説明しますです」

涙を堪えていると、さっきから空気になっていた神様が弱々しく手を挙げて、俺のそばに寄ってきた。結構ちっちゃかったんだな。１４０くらいか。

「そんなじろじろ見ないでください。えっと、単刀直入に言いますね。
あなたが必要でした。もう一度この神聖大魔導士を、こちらの世界に呼ぶためには」

「……どゆこと？」

「ですから、あなたはソロモンの生まれ変わりで、最強の召喚士なんですよ、実は」

Ｗｅｌｌ．．．ｐａｒｄｏｎ　ｍｅ？

「あなたは、異世界の門を一人で開けられる唯一の　召喚士　です」

Ｏｈ　なるほど分からん理解出来ん頭が理解しようとしてない混乱してきたパニッシュデス…

「簡単に言うと、チート存在。俺＿Ｔｕｅｅｅｅ！！！　です」

ふー。　不覚にも最後ので理解した。
　つまりはテンプレだと。第三話でようやく主人公気質が出てきましたと。

いよっしゃっっ！！

「ついでにですね、晶さんはまだ力を使いこなせていません。あなたの意志に反して勝手に召喚は行われているんですよ？」

一人ガッツポーズをしている俺に、神様は釘を刺すように告げる。

「えっ、俺なんか召喚してたっけ？」

アスモデウスは自分の意志だったし……。

「ええ、魔族の皆さんも驚いてるじゃないですか。ほら、あなたの後ろに――――――」

その言葉で、俺はすぐに後ろを振り返る。

あれ？　俺の影伸びてね？
その先、ちょうどさっき俺が叩きつけられていた場所には……漆黒の鎧。

「ちょっ……これまさかっ、？鐵？」

呼応するような歯車の音。
その出で立ち、どっからどう見ても重力を操るアスラ〇キーナだった。

……髪の解けた嵩月さん、いいよね。

759

続くよ☆

第三話　異世界に召還　出会い頭のドルマドン編　（後書き）

ども。中間が近い瀧澤志栄です。
最近は二次創作の方をやってたので遅くなりました。
〜〜の抗争　って奴です。ＩＤは変えてますが……。

次回は病的に熱い男が召喚される予定です。
受け狙いにサブタイトルを公開　私は後二回変身を残している編です。
それではではっ！！　　Ｔｓｈｉｅｉ

アカウント変更のお知らせ

お久しぶりです。
アカウントを分けていたら、いつのまにかこっちを放置してしまっていたので、今回を以てアカウントを統合し、ついでにリメイクをして新たに連載しようと思います。
移動先は『魚影』です。

さぁて、稚拙な文をどう直そうか…

基本、「小説家になろう」では異世界系ご都合主義が流行るらしいので、書いてみたら可哀そうなヒロインを主人公が貶してるだけの小説、っていう方向性でやってるんですがね。

ご都合主義から現実に戻ってきてしまった厨二病ヒロインと、その他厨二な仲間達。

高二病なのにファンタジックな能力を手に入れちゃってげんなりする主人公。

うん、斬新さだけで生きてる話ですね。それ以外になにも面白みが無いですね。

まあそんな感じで、今度からは『魚影』の方を、よろしくおねがいします！

―Ｔｓｈｉｅｉ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2346l/

間違って勇者を召喚してました。　反省はしません！

2010年10月14日16時32分発行